落穂拾

へ 5
6608

早稻田大學圖書
911.311 E156

鸚鵡ハ山舞に巣くふことなし一枝
をうつして来る人にありて舞ふ座
裡にかの鸚の啼は鳳雛の巣をまふる
来むおもふことをかきまかせて舞
事は旅をちかひの侍風土をして
あらそひ李を冊子とあつめ類冊に句
をあつめ綴ること秋の木の

へ5
6608
昭28 〔?〕
学部図書に移管48年6月8日
60426
早稲田大学教育学部図書
木田盛編
私村單車漢文庫
（寛文4）
<2000-390>

東ふの春をまちてめくる年毎の色
みやこ人花見の代々の細工ものたえす
ゆゑ風流人さかりの花毎に作意
あまた瑞の花のさかりをたのしみ
花をあつめ所々にめてたき事にて
摂津の國人部のもとに手をつくし
おのもおのも所々にあつめてほめ

此山とかける事ハ常陸植接させ
歸りて櫻木に題詠ハ人の名の
一株を求めて乗せて昼夜まきて
世にもてはやすの例ハ並けし
あらはしたる小冊を廣めの始にそ
主人 書

落穂拾集

名所 旧跡

堀兼の井は底浅しくさの露　江戸 大饒

水いろも露ふ染りぬ角田川　子住 梅露

穂麦ふゑ雲雀むさしを女川　信州 如亭

我妻のきへくるやすみた川　武州 有臺

はれ月流れと出そうつゝ川　可都里

秋乃蝶紀の玉川を流れとり　常州 風實

名とりそ葉は清水を衣川　江戸崎 小義

ちる風や玉川の夜ゝ松の風　江戸 碩宙

住の江やはるゝ奥吹あらしの風　甲州 太年

すゝしさや松も若葉に出の月　武州 玉芝

難波江や芦刈しも冬の月　江戸 五岳

霧むすびて詠て定し志賀の山　信州 易足

鹿嶋や秋も秋なる志賀の山　楚水

さゝなみや漣や志賀をり時雨　甲州 乙鳥

和哥山に積く木の葉哉心　江戸摘露改 損宙

箱根の雲や画できる堂　月巣

宮城野や萩を行よ来て不二の山　石鳴

木からしや只白妙にけふしそめ　買叟

裕然て来しくなりぬ不二の山　羽州 木賀

笑ふまに別まさる紅葉や安積山　乙鴨

有明や蝴の色なる伝史せず　絲山

あのふ也山の奥ゆへ赤つく　東巌

擬見て宗合持ちさる不二　妙仙

笠島や手元尽くせ蛙　呉秋

袖浦や夜の景しき淡路島　羽州 昆陀

霧の夜や二ッのさしれ伝吏山　素樸

拂子のわかれて吹や蓮華塁　黒岑

蝶や世をはらつしの温海山　上毛 道栖

辛崎の松はつゆまゝの雪　江戸 一蕙

唐土の夜をいそくし月蓮　甲州 百蕙

加ら崎に母来るよもこしまもせ　羽州 杖和

みさ芽れ先追ふすめ蝶の華　信州 文雪

ふえ火の消て夜深く又破の月　文亀

焼あとや我も生まて出る月　梨翁

白露や有明山とさくあり　信州 伯希

世の名をかへ雲ふて時間も山の月　蟻道

篠おる二上や名の山ほとゝぎ　鳳眉

御幸阪てたや時雨ぬ東山　月奇

更級や露に碎てくさの月　桃之

昆布の梅るえる関に露名　武州 碩布

竹の子や晒韮しますくもるれ示　勢州 省吾

ふりくえ露を安積のいる雉　上毛 芽丸

春の日を余程つむや筑波山　古節

稲妻の眼も見えけり江戸の波　来五

花見えて楼みえて江戸の浦　葵宇

橋立やり雁つゞく秋の雲　布雪

曙や花の香すむよしれや月　臨山

鶯も出て見よ江戸の雪明り　江戸　来志

蝉なくや何をするやの峠し山　寥松

秋風にとりさて寒し伊香保風　桃家

二ツ三ツ手をきりのかくる隅田川　石蟾

利根川へ落くる早やかへる雁　上州　暉玉

呼子鳥も見えて母し来哉　信州　長荘

湖の春のさへ見ゆるはつさ哉　其戯

乞食の心さへ見し須磨の花　五山

最上川雪のきされて流れ気　長翠

今日とせて出てみあるや月の山　羽州　宇工

春雨の晴しとたつるな墨田川　千住　稲波

鴨川や寒さ限りなき雪あかり　貞秀

てふ蝶や一畑こしてまつの春　信州　栖水

湖の水かわりしてきのふけふ　銚子 梅史

足の湯見えそめぬ凡めし山　上毛 柳暁

春さむや赤城を下りて出る　里川

押送りすゝんや能登の手に出る　このゝ

宮る錦や諏訪の折るをてあやめ草　砥吉

國名　都ね　地名

霞たり安房も上總も水のいろ　千住 鯉隠

因幡から連なる湖てらし　上毛 定佐

降り出すや律義な本舟の手届　江戸 孤山

咲桜の上野なつかしふるさと　武州 猩河

山をこえて上野へ切れてきれつゝ　雪丸

朧夜にたちかゝる上野の月夜かな　下毛 白翠

信濃路や霞の底の水の音　上毛 志溢

年よりも若さよ木曽のゆきゝ　士朗

みちのくにたどり来て梅の降る也　蔦三

銚子川や駿河の海の雲の峯　江戸 孝洲

蜀魂なくや箱根の霧の中　出卯

五月雨の芦田をくさきや霧のまゝ　下毛 ちか皎

是よりも散にこの花娘のたしめ　崖外

一株もつと影や清盛へ手の届く　江戸 茶顔

木曾山や木にも雪なれば猫柳　暁汀

ここらのや梅を一里のいひ傳へ　羽州 鶴山

蝶二つ三つ来て花や梅のさかり　下毛 呂光

入月影や田にたつ寺で舞引　素考

少勝に鶯まろき声高し　芳朱

黄昏も梅見ごろや松の枝　武州 野道安

笠寝の山さへいつまでも肌寒し　信州 進高

綿衣の襟つくやまだ肌寒し　上毛 結女

去来の江戸をたづねて花の月　下毛 百携

水鳥の生に向ひにまた清盛ま　大坂 百堂

大坂の橋も多さよあまの川　桐栖

月の梅やわきもちに古き杖の影　羽州 茶蹊

枝ふりに花なき影もまくの花　千住 星唯

手を合ける子等も枯て大師時　江戸 掌居

神祇 釋教

寺の名なと問へてし答らず外之堂　應々

年を経て御堂建けり花の春　雪於

精霊は終りめてたき御寺かな　信州 白堂

木曽殿の宮居ゆかしや椿咲　伯針

山里やちりこほれても御忌の鐘　壷伯

灌仏や竹の一天末子供　品川 双湖

静さや石蕗咲ちるの女客　江戸 荷乙

山さとの蓮め忍もしらぬの花　道彦

花守の上にもこほれ七夕星　下サ 梅史

梅十枝の宿を嫁しき月夜かな　信州尼 梅温

世を外に秋葉ちるとき二尊院　信州 一桃

虚言いへとも死なし魂奠　成美

小豆啜傳手次てや梅の花　江戸 斗遐

念月の此んわすれし神路山　信州 叢

空みのん人に語らん神路山　京 蒼虬

芭蕉忌 二句

猿に蓑着せん大子手時雨降　羽州 文河

旅の空を枯るんを時雨の日　呉山

是人云々ともの葉ならんや建ちる　スカ川 多代め

法華寺の夜明ゐしむらさめし　相州 雉啄

中つさや浮雲ちらす浮御堂　上毛 兎月

月も影ゐつゝむ花ぞや一月寺　千住 鯉角

木母寺の小雨ゐ濡て花曇　歓水

佛ゐも別まつれる桐火桶　エチコ 米澤

萩さくや香い孫来の墓参り　上毛 松亭

涼ゆる寺ちるの月夜や花堂　上毛 柳二

獅子ちるや寺ゐのちる杖の露　下毛 常高

虎くや霧を延すらすの庵て　金馬

五月雨の寒さも思い寛永寺　下毛 花笑

出でゝ僧と蓮の香る焼火ゐ影　几鳥

霧ゐのく塩ゐちりける帰寺哉　惟亭

二夕追る居の見ゆる枯野ゐ寺　巣樹

秋草きし作ゐるや萩の堂　このみ

孫もちも仏の影もちる寺小寺　楼南

帰仏の前となる哉也ゐ　羽州 扇枝

大ちるの桂ちれ女余宮ゐ影　上毛 三車

行燈へ菊至の飛十夜ゐ事　三州 琴岳

海棠や灯ともし比の本願寺　江戸　蓼南

哥鳥中よく来り毎法会詣　奥州　盛明

今也忘れて杉本まで人垣の梅　蒼湖

萬無翁秋魂桜のひとり客　江戸　砥嶺

神花や街の神の幣とゝむ　勢州　推古

仁和寺へ糊売入りやなく雲雀　尾州　月底

擁衣や雲林院の小さき身　大阪　一宵

郭公鳴てこや紫雲て飛　蕉雨

茶檪

茶はなやおこさなりて山櫻　甲州　蟹守

降る花上野の鐘の霄かな　岳中

松ゆくと花と見えしに杵蝙の声　下井　寉老

神花や漆子売よ出る月夜　千住　菫帝

花ちらす目のあれはちる桜かな　上毛　乙人

鳴鳥の限りちらさりなむの面　峰雪

山や桜花に七日のうそこの雅　梅雪

花に眼を洗ひていみ桜旅せん　千住　孝賀

君まつのんきを捨くに一蓮さくら　信州　白理

花一つちらぬうちより池の中　江戸 五粟

散花の梢もやさしこの夕哉　信州 秋菜

花ちりて桜木数ハなかりけり　羽州 丈二

深山木にまじひ来なちる桜　アキ 玄蛙

咲としらさし花にかくろうす　江州 蕙布

花に池ひらきこぼして梢より　三州 卓池

梅柳　探

芽柳やまのよみならみよの廻り　下毛 金馬

茶院に梅まゐらまし椿の末　上毛 蓬尺

手をうけて二三輪ほど大寂探　江戸女 耕雪

葛飾や去年を霞て梅見人　三和

飛しよ梅見る丘や花見原　東紫

家に居て去年の花有赤探　一楪

梅さくや人の上こそめれたる　信州 雀翁

勝たぬお猿なきやまさきかな　吾三

梅さくやいかなるにてもよその月　相州 東舎

波のまへを細うくする柳かな　上毛 雪尺

小流をとうても同しやなぎかな　江戸 松井

うつくしき夢の盈し柳にら　下サ　李峰

篝ゟ市し梅や南仏の古らつゝ　エチコ　月叙

人の住しいふ人来より梅の宅　天涯

今朝てらそ走一つもゆれ梅の花　石海

梅咲てたゝしき捨るたし居にし　信州　緑庵

白梅やうしれ京のいくとこ六　松翁

やふ扉の余寒てぬりぬ赤梅　利喬

春の梅をとりて追赤き梅ゟ香ふ　下毛　道※

松風の北情のやちるき梅よなり　羽州　槐吏

うちちらき咲も走ら梅の月　上毛　帯一

四時草木

野の花よさしらすまでの妹ゟ門　エチコ　了々

花すゝきそよもやや月の面よ縦　信州　月邦

我宿のまいろうしや福寿草　三民

昇荒て乳草も上の木立うまゞ　周行

麦の芽つよりくも霜つけたを招　苣丸

存分の身れて吉し折紫苑にら　五什

教もちち深し時雨を深るゝに　徐涯

連翹や黄昏すきの月白し　甲州 吟圃

手すてたん柳見えつりけり　江戸 子之

世の中もよそに岸や人の上　上毛 素柳

なきしるやひとて守る峰の雲　孟竹叟 亀息

山吹やぬるゝと見ゆる芥川　壺半

三日月の入る山なかりおほろ花　羽州 松才

むくりきし名とて夕あかりまたの字　涼石

春の日の二人まし華老るらん　左毎里

出る先見月見ゝつゝし梅娌　信州 武曰

白きの盛いえんきの中　下毛 雲嘯

ねふりや出水の流れ眠に余る　上毛 杏雨

四季月

有明の名に老ひ月にあまる光かな　三州 秋峯

満月に立てもつても雲なりけり　信州 若人

小松野の一重まさかさ月かな　左粟

木の葉降る影も名所や山の月　蕙國

末山のいくつさまて雨れぬれ月　石明

明月の有や落に夜を探すか　上毛 川二

雀の声て残る文月の名たゞくし　信州古人 梓逵

宵月や雁もつれなき後れ雲　庭樹

后の月此頃は余所も名残なし　思月

名月のうてなゝらくすゝきかな　葦齢

よせてちいさく茶ね月の雲　禾本

浮く浮かみ寄しんと白み月　禎雅

何処追ふ人てもふさし名々の月　巣湃

雲水の間し色ちらすれたる月　正阿

蒔もぬるくたしまや月見る　女 梅光

大空へ出ぬけて夜はゆく麦の月　勢州 昌作

桐の木の影なきちる人家の月　大坂 鳳眉

橋越て見るうちの人きえまのつき　羽州 仙李

桐の葉の落なれなし家の月　信州 文席

柿桐や障子あけさ見る月　清淡

むら雨の降るもきえへ只今の月　孝訥

一つ流し押ぬけいの雲て見る月　武州 泰之

木の影もちらで晴し月見る　江戸 ぬ水

刈萱の声してふけて十三夜　幸雄

鳥獣虫

廣澤やあかるうちに啼鴫　信州 何頼

丁字やゑは親木ハ厂翅檜　蛙村

啼鴨の足あともぬるむ北川へ　素桂

湖をひと川てもちぬる蛍　曲碩

不二は獸水にかへや蛙なく　古柿

呼ぶ追火の宗衣なれ御鳴　岩水

月花保鏡か呼よ酒辛くあま　上毛 南栄

今宵終も鴇を集まる阿る　玉知

黄色のふくつ月ちかれ九日嘗ぬり　信州 八朗

川瀬の綾くふくし洩出てます　自松

之る丁又ちきて数の別るよ　玉蓮

嵐より出る中やも数は由き　虚白

月鶯よつやすゝめやとてしね　大坂 奇渕

鴨の声波見あちある夜明ぬ　信州 拘雲

来る衣の耳ぬ孫るや鹿は声　一房

黄鳥は宗れうきや蛇声し　女 白紅

川きゝや水の底あも尾花吹　墨水 菊塢

須磨の是許ゆしてもやとふる　勢州　英之

照るよみの見へしや粉のこのり　信州　一調

蓑著しやうねしも秋の暮　百洞

梅る日のありてなくも雲暮る　梅恵

淋しさ身とられて寂しき蛍かな　桃虫

是とひ石をまけれども虫の声　蹄杖

我やとも詠来なれて月花　桐居

是その居露ようる二月この靜　緑白

佐白の何処ゆうる峰を残ぬ波　上毛　居丸

是身何の間も無き一見ころんの靜　相州　房溪

よく晴けんにてちらくさ里ころ　蕉本

野坐りて色く浪まくるも嫌　雄島

妻子を我ものめして雲若鳴　淋山

静さに蝶の家主入垣根の客　江州　子新

牛乙の水すゝむころや蜀魂　尾州　而后

垣根の雪明けばれてとなく　月庭

是るく寝てまくると与ろ日より　相州　子石

ある侘よろ合虫の来てまゝの　上毛　米沢

にあはぬ人の使しや礼さま哉　江戸　玉光

黄昏の従者もこゑ戸さゝる　宇橋

首の夜や雲も帰る色を深ゝ　上毛　杵臼

戸口まて山の雫かゝりけり　餘力

家路ゆく妻子に迹へ声けり　麴舟

日の暮も雨をもいとふ飛蛙かな　下毛　其梔

下のきは芦は波こそ帰り見り　子荻

昼も小茄子もあらぬ人住甲　上毛　一峯

満月や鶏山に落て不如帰　拾葉

梅か香へ名をは花の木はなし哉　上毛　梅宙

四季障稲

咲たる桜の木に香は美しき雪　奥州　曰人

丹けの海へかゝる東の遠み　女　亀丸

春風の一日ゆりし小うまみ　武州　石蘿

降ちる秋を起すや草の雪　上毛歌夕叟　至吼

たちの雪ゆふ路に影も花　芥業

昔よりあるかれて雪は松　橘老

ユたまきやよりはあさむへし　三郎良

雪積や野の堺も見えぬ旅道　信州　麻足

真丸に夜の明てあり雪の山　河有

雪の山出来これ程になりし　葉堂

詩も旅寝橋や明見の白　甲州　一作

夢ふく声小夜ふけて寒けれ　青好

一ゐるきてつらき峰や清西明了　湧〻

飛鳥も千里とまくら夷の雪　羽州　指月

ともつめ塚の七ツに降る雪　丹八　武懐

静さを一夜にあまる夷の雪　上毛　塔笈

月の外錦く星の落て霰かな　エキコ　三交

丁の花秋に色なしと松の雪　上毛　常和

いさきよき松のさかきや別家　真彦

羈旅

着て吹風の秋まつ旅なり船　江戸　月守

梅さくや古人多き東ふ枕　上毛　雄周

松島の月まくらや船る寺　里川

宿りけん塩の附白を波の音　志光

旅篭屋の炭焼も路傍に　壷半

西東にすまひて来を手まくら　信州 魯恭

一夜ゝの宿は明石よはちの月　東巣

出る日も木曾をたつねて鹿の声　丙延

旅人の夕飯を待しねぶのたね　羽州 東二

梅咲て跡りかまき旅衣り秋　下毛 梅月

来年や都出ぬけてこひん　一夢

元日の旅人は秋須广の浦　スヽ 西月

述懐

五十年己ときのふも梅の花　武州 文玉

旅の宿ふ梅まで来て花よかり　菓兆

白露や花ゝ衣のまへきとの　羽州 河丘

白髪にも驚さく秋の立月かな　二丘

秋花ぬ思ひの三山も存もし　葳京

家の名に白髪くて無理な事　暁む

花の身は作も出家し後の月　也和

手みても住りとめのとを秋　李堆

きくもきくや秋もくれん椎ヶ下　杜吼

来母にむんとし似さゐや　月居

来しよ車の影ゝ秋の声　羽州　五瓢

母恋し松にもしれ月の夜　信州　呑鳥

旅人を世よ外にも花すゝき　以吉

こえてさへ来る浮世のひとりかな　下毛　啾月

花見してゝらしも花を見る哉　上毛　麻大

菊の秋月日は聞くほどしかし　信州　柏渓

袖露やさらしは命とられ　奥州　了李

草も暮る日さへ幾日ある露の上　江州　申斎

あかる弛し草の見へくる月夜哉　大坂　万松

菜畑へ向て出るや花の雲　下サ　百瑞

ちるまてもゝれゝあなたを枯尾花　信州　北良

初秋の雨も振るいまちて来る　可厚

今年の秋の夕べ命や雁の声　筆丈

初秋を見るも山のも花ゝそ　龍池

年もたちや少しを見て秋の暮　呉八

祖母の弔のうち風

拾くする雨の空や秋も十月かな　園朱

雁や鳴きて来るにひとり哉　乙二

売物の中に上をかゝる人参若菜　素檗

時候

分ける手や水田のあかり先　下毛　奥辰

岸たよる小舟や冬至の梅花　信州　東雲

時さへ出雲のちくふらん此中　幹之

あらふみて柳見ゆる竜ん下　上毛　両賀

汐汲が油も乾く彼岸かな　江戸　護物

五節句此内

七草や祝ひのひとつとほしはや　江戸　以東

ほとりまで今宵て中しや雪みえ来　丹州　宗舟

芹若葉書の上はしたゝくのもと　尾州　蝸籬

峯山のさつき幟は木の右か　沙鷗

足弱くを並んでくゝるちゝまる　信州　桃丘

菊の香の九月は人あやまる處　如水

古き世を此句人もゆり菖蒲　丹州女　浩ゞ

一世界にてよき幟の旗　奥州　芳雨

九日とて行くとて此菊咲　信州　鬼洲

後の菊さて兵の暮はかゝり　里丹

螢火の夢るも花たて雛哉　羽州　巴江

人倫

秋かせよ世を経るも京の人　信州　奇峯

梅か香やかくし妻する小妻かな　梅亭

秋の暮男の毎年と物かな　某鴎

菜の花や子のたはむれとしてまて　下毛　葉休

海老売の声のつきありし小正月　武州　古言

擂鉢の音や寝ん五月白　羽州　佐平

春　昆　雑

元朝や耕す田所は寿藤なる　尾州　庵汀

東海の人の皆ものならは書　林鷲

あ由は山家のそらや検の紋　寿言

霞みて中なるの舟なりて人も船　茂什

也呆さ人流くものあり山は家　上毛　茶徑

春の捐の松ふくものさし　西涎

海の霧果もあらあ寿や寿　掬月

松竹の鶴も世ゆかし霞　松帽

本やその夢もとりなの霞　秀白

明てある夜の松風や鶯ゑむ　信州　櫟花
梅かゝやさそて行月に風もなし　旅巴
是れとらふかふに香を花は鳥　斎三
旅人の挑燈さへし柳かな　京都　十丈
猫の恋清女か茶の湯淋しき　下毛　京水
白梅の花りくまてうちま夜なり　上毛　柳子
静さの水にあまりてよる霞　正鶴
元日や花ある春に出たれん　江戸　孤星
七草やもまの子の出来て松の内　嵩笠

呼つきの信や春のよの名き　信州　蕙々
鶯は舞しくりさ数の水　下州　桂九
松の霜鶴の鳴りしもこゆる哉　葵峡
遠山は未丹泥乃ふる舎哉　子住　豆畦
花のつるすりやつりてゆくさ海苔　鏡水
川一重ふみて橋なふさくらかな　三巴
白魚のすゝ来るある月見かな　武州　遊雲
蝶々や三日詠其の山と見ゆる　奥州　天洲
七つ坊や今日角ふえ新のまは　今人

はや月別てのちもすゝし田川　江戸　桂浩

松涼や波の音ちるこゝの中　松眉

まへの山んかあまりてさへのしき　池田　呉光

蛉の腹にちふる穂芽ちる柳かな　ヱチゴ　桐堂

夏

横にう四月にしそりよの柏　相州　文也

涼しは名の家る小田や苗五寸　駿州　作二

日のさすに鳴し林麓より家木立　親里

あふせの畑をはらむ夏ふかし　素峨

捲たる人鏡をとって月明安き　蕉居

涼風や家並月たる人の冬　鈍盤

厚板八葉も無は床を掛　上州　月之

桃花しと水ぬすや床さし生　江戸　久城

雲てよる雲も冴て麻せ麦　武州　可布

夕すゞしさに人の生まるゝし　信州　一之

来とは雨を揚より門は蝿　一葉

蛇起の若葉太るより八重葎　挹芝

秋、

稲妻やくれ行雲のちぎれ際　信州 柳之

淋しさは強て虫らん啼子鳴　雪頂

秋虫て秋と驚くちる子哉　奥尺

天の川家はかず流れより　庸堂

秋風てとこしも頭ず延る哉　芋龍

夜寒てはなさき秋ちれ天の川　羽州 松径

秋暮の山浅くちるまぬるかな　エチゴ 之徳

あさ白水家の伊しのみのり　上毛 一鶴

草深く二方秋見るすすきかな　武州 有莪

冬

炬燵の難題しあまりれ拍子　信州 葛古

十月や蝿の来て居る影の薮　灸国

松盛やをらし炭のやきかする　古根

只ひろき梅の梢もしほれの空　羽州 阿息

来歌の来月もあるあさふさ哉　志葉

足元の冬とちぎり水のえ哉　乙麦

蛤の附白て通る鰤篭の殻　仙台 梅臼

山の名隣月をとりけみ神無月　子住 孝花

春暮て畑の高さや菜種の穂　下毛　荘六

乾あし夜る居ちさへ枯芒哉　江戸　文貫

四時混雑

けふる秋の智恵ありて菊の花　大坂　井眉

松葉降ときれ〳〵や啼鳥　本尭

六月は桜あさきの哀なり　武州　五渡

芋の葉もおちて掲よ置魂　南升

乃如降ゟ直す間に映る兎　京〻

愚多は花をちらして蝸牛　上毛　湛昕

毎晴る岸や柳をぞて網　信州　底山

清見禅刹眺望

すゝしさや坐るまゝに三保子へ入　白雄

菊の戸のまゝ日暮ぬ文附る　一湖

分別の外にちる也菊の露　山水

思ひを遂て無又なくて蝶哉　上毛新田　瑶林女

暮の月も且は新よ梅の花　錦水女

冬ゆふや昼を瞼の白椿　浦人

よ所ふりてまゝ月ようや梅の花　句光

取ゝ追ふ蓑て宿るゝよしらず　尾州 匡彦

卯の花や明ても黒き毎の家　エチコ 吟泉

手の届く新や花木の蓑子　江戸 孤潤

水さるや入日のとくくもの上　王岱

梅もさかへ柳さへても引くる　芦庵

山さへ花降へさきかし枕やす　信州 蘇山

結ぶ人や秋ちらし跳きる白の声　栗下

うら山も冬の月よさへて秋の夕れ　斉丸

皆白ても鏡白ても皆温泉の有ハ　世紀

木からや出ゝしさ日の尺ならぬ　信州 甚詳

欲てもる粕もあき木寿河白　北河

眼ふも丸て粉ゑ花の多　草嵜

繖日や冬る花彩を深りける　古華

鼻きさ見やんかせりき山野雲　摂高

明けてん鳴る鳥も冬りく風峰　謹工石

明るさかん空の花もする木槿の脇　古默

梅の花冬てさかり枝よなうし　竹翁

白露や袴のころの銀のゆの　欽堂

暮ぬまに身にしみ入る寺の鐘　皐高
霧まよふ燈をたのむ案山子かな　猿叟
あまり夜を残して月の十三夜　白峰
舟の旅篝火深くて明ぬ露　蕉和
海の名の月のおもかげ晴にけり　梅露
泥亀も浮へ一夜の月今宵　岳洲
鳴虫は株中の秋なれまりし寺　梧露
月寒し小田の蛙はなく夜哉　紫苑
虫なくや身に来秋はいろとなく　樟高

乙鳥のいそぎて老はねかなし　信州　弦武
聴なくや田の乾の藤袴　志孝
秋のひとこゑで萩さくいろりかな　自足
稲妻をちらりと見しや露は散　少年　枕濤
夕霧や寺の小まつに流れゆく　一旬
いちゃんと寺の木槿は咲にけり　鬼足
秋とは中なきあきの風　花群
一さかり案山子の並ぶ小山哉　三巴
横筋の池より低き夕の鳴　与父

まくらなり此まゝに便ふ丁寧　信州　吉斎
畑毎の暮て手足や春の風　千丈
けふもまた寄る追ひて丘かすみ　鷹山
夕山や見れ高る杖はらいの陰　上毛　春巣
梅の花梅は世にし嬉しき世と　潜山
月の夜は霧に拭て来見けり　桃仙
鶯や二声ぬる春の声らしき　如鳩
三日月の居ちからや風騒く　牛交
天つ日を見よと宮城が居　可石

旅の人ほのりて来しより咲　上毛　文奥
陽炎やゝめぐる屋く小沼見姿　岩川
人影て歩たれ音あり夜の雪　池明
始やさし路のみぬも十月の杖　咲葉
三丈の杖の雪ゆるや山乃嵐　誠丈
晩ゆのころ斎み晴さし陣か岳　阿兮
是も皆の方便まるや熟し柿　加香
眼よ見てゆるや柳乃日和哉　猿圃
芦やその利根川の奥ハ志ら浪　春峨

きちかう日脚屋て芸をみち　上毛　東蕘
月を肯採るを手掛木山の家　其に
未し枩木筆とりまてはふの月　兀柿
あの小米面を占ふ夜かな　白居
林の衣の山みかりて神な葉　東字
吊て塚家を蹴しうまのいか　八千楢
略るの山を越行や雪の海　ちかめ
届つらんぬ宿取らうち月一夜　承諾
麻あやらんえ去ろ水田居　大樗

たしかなく春雨かけるかまかな　羽州　守喬
正月や切燈立るる馬屋に　漁嵐
初蛍井のゝ前せんなの雲　来浮
塚の月ゑみ仙れ深山をゑく　知兮
稲積て両戸の明ね中みかな　奥川又　踏巣
手多帰し家路も見て年の市　越後水原　弄山
啼蛙ゑ一尺の空ここうち　田数老
月前み不足といえ山家かな　蛙堂
旅人の外畢あかすて木槿かな　先来

菖蒲草天井低し梅雨かな　五晄

濱下駄もさらさて行く夜涼かな　門大安寺　東栽

ゆく水も行方知らず嵐　加賀　夜鹿

咲きかへて日にちもなくて初嵐　下野　星谷

日に添ふて冷える柳の寒さかな　武州　湖山

裏山の夏の月見に来る湖かな　江戸　岐雪

茅柳や山風寒き馬の上　梅寿

蛤に出る秋なかなか楓　越後　双湖

萩咲くや宵は雨知る裏戸かな　越後水原　季珉

春の月も見さして戻る松柏　上毛　旧居

遠山の白夜更かしや高の上　左南

待ちわびの雲のかかりし月結夜　完明

白露て桔梗すゝしさ咲き乱る　常州　白足

涼しさの白の新さし百合の花　芦吹

月の新のすゝき夜すてて行く哉　五冊

伊豆海苔の見るも嬉しき敷哉　上総　呼牛

蓮の葉や人を隔つ夜の雨　云坪

菊の花折りて見せる袖で来る踊　奥州　白考

冬枯やうしろ手に持油筒　奥州 卓堂
舩白に蚤ものをふるふばかり　玉弦
手折れて露となり色萩の花　摂州 古橋
明れやえよしとすれて咲木槿　伊豆 一瓢
汐の香追て傍げかすまゝに　三河 塞馬
舟家の毎日の妻子やて北川　卓池
松植てここまで足のあり雲の峯　江州 ちるみ
柿の木もちる鶏雛も小春かな　芋也
秋の暮人毎出るも世の中　武州 俊斎

幸山の秋や峰こすも雲　柏石
寿会に見るも焚村や寿の雪　江戸 吐山
我に来春の跡をちらりより　史子
旅人を魚のしまやゆるもより　菁石
御山や梅の花追ひてちる地　仙生
冬ハ水音さゆるすまゝに　白圭
人の身はあはれ様ちる梢かな　あく
若の夢にまぎれ山路かな　柾架
流芸寒に凍のこほる余寒かな　存桂

引汐やつまれゆし母の母子の　江戸 露山
花菜咲の続ある寺の耕地や　啄旦
さす棹に蹲し暮もたつ哉　子之
吹風のまだ去らで梅のさかり　孤星
小春あるや京土産をなげし笠　松里
水鳥の声もちるゝたそがれに　菊女
いく夜さも梅に客ある山家かな　杖堆
神尾や来る人あり清浄の家　吉柳
こゝろ出て月夜にしぼや冬の篭　芳極

落る手本の花の鼻や雲の影　菫壺
吾春の南へゆくよつるほし哉　古人 子厚
足もと花散るゝへしやよる蛙　亀蓬
梅柳ともにたつの月夜かな　杲窩
塵あり日くさ浄きや村落た　相州 槐二
くまの出入まをふるさし春　苔吉
降る白の跡あるさきるや時鳥　平専
ゆふめ若葉で水も手をふ二つの山　境水
春風の山にあるそこ存るまゝ　柳之

暁の東福寺十日のまへの春　信州　標之

橋杭や名もまたうかむ宇治の水　相州　方解

冬の夜の積るや雪の松の月　甲州　芋丸

黄菊白菊我をしる花なれや　童行

五月雨の六月にまかる三島人　江戸　詠梅

岩間やこゑ有る蟬も雨の中　吉丁

月見まで生れた月をかへりや時雨　子佐　青鷲

花の外に出て見よ三日の朝　玉村

出立日の京にたつ袖の月　江戸　伯支

天明丁未歳二月朔日

八ツ過より雨ふり出けり

黄昏の雨に門出けり春の雨　蕉雨

春もはや暮れゆく里の遠道　雄嶺

喰積を仕舞ふ人の旅立ち　雨

指ころり渡す舟の名残哉　嶺

拝みも無くてかゞみの上月二つ　雨

秋の名残の村穂子子　山嶺

侶痩の手を過き撫るに叩紀　雨
櫨を見つけは高松の根に付く　嶺
唐崎の生まれ申し面白き　雨
聖の別かへあまた舟　嶺
星よふく撞れ出ても鳴りて好みさ過　雨
植に栗女の主宰ぬ龍尾子　嶺
庭鞠の後申し月に走りぬけ　雨
小鳥の実たるに帝の手過　嶺

東西ぬるも薔薇は家の屋過し　雨
篠の寄りし中せきむ幣串　嶺
せんさくの届し甚の下侍　雨
被露さ手まて越るなり坂　嶺
悲葉暮き目覚に貸所さ　、
仲右ての生解る糸の間　雨
出備ゑ人に呼ぶ和二人　嶺
年家方へ重ね用ゐに紬垣　雨

あゆき道のゝ居る人も枯蔓　嶺
有の毎日雪の彩白　雨
丁嚀に信を解く弥子の挟持　嶺
峰の留を見て董貰ふ女　雨
下総の境とは京も同じ身　嶺
松手あるの水を騰の行　雨
冬気入し月の待てる雲の色　嶺
森さるも身に染く綿の衣褐　雨

陣に隠せても流ぶ茶振舞　嶺
昔良か手信のころ手を置　雨
山の手ハ舞の麻衾ほ畢の範　嶺
弓もやゝ縁ハ眉の満しき　雨
一和尚の隠も来りゆ西東　嶺
梅の香を切て出を振る雪　雨

此集の桜木ころにちらまであらぬ何ともいは
序ハはあはれに趣ハ序にも重津
ゟ絵多きハ茶里ホ白小箸唐画人
ハ菜年も百二摺上の一冊とあり
板元もさ程にかえらぬ以へハ古きも出
せぬ様に上木以や物子
あらぬ者何とも多く集やら能く
居らハ雨を漢の見と絵を式

不易流行の句を眼にも耳に
さとされ絵に鮮能く見うる古き
書は古き文の雨に阿別に箸一
見るに津らを古き風にもさらぬ
も画者の一徳とも舞し江戸
かつしかの里に何ともふら人
伯来のふう家

吉呈八

旭觀亭

丹山

信州輕井澤町
避暑
つるや
旅館
L'HOTEL DE TSURUYA
KARUIZAWA